中国淮北平原調査記

鶴間和幸

調査の目的

黄河と淮河（歴史上は淮水と呼ぶ）に挟まれた淮北平原は、中国古代史上きわめて重要な位置を占めてきた。淮北平原とは黄河と長江にはさまれた淮河から北の黄河につらなる平原であり、黄河が氾濫したときには黄河も山東丘陵の南、この平原を淮河に向かって流れ、汝河、潁河（えいが）、渦河（かが）などの支流も平行して淮河に注いでいる。[1] 春秋時代末期に孔子（前五五二～前四七九）が魯の国を出て、弟子たちとともに十四年間（前四九七～前四八四）にわたる放浪の旅に出たときに、訪れたのは小国の衛、曹、宋、鄭、陳、蔡であり、これらはいずれも淮北平原に位置していた。『論語』によれば、孔子が衛の国では衛の霊公から戦陣のことを問われたときに、軍旅のことはまだ学んでないと答えた（巻第八衛霊公第十五）。宋の国では桓魋（かんたい）に襲われて、「桓魋其れ予（わ）れを如何」（桓魋ごときになにができよう）と言って生き延びている（巻第四述而第七）。鄭の国では、『史記』巻四七孔子世家によれば、孔子が弟子たちとはぐれて鄭

の国都の城郭の東門でたたずんでいると、鄭の人々から「喪家の狗」（葬儀を出して餌も与えらずに疲れ切った狗）のようだと形容されたという。陳の国では三年も滞在しながら、「帰らんか、帰らんか」といい陳を去る（『論語』巻第三公冶長第五）。陳と蔡の国の間では、いよいよ食糧も尽き、弟子たちは疲労から立ち上がることもできなかった。弟子の子路は孔子に「君子も亦た窮すること有るか」と皮肉をいった（『論語』巻第八衛霊公第十五）。孔子は、否定的な話しか残されていないこれらの小国をなぜわざわざ訪れたのか、『論語』は何も語ってくれない。何よりもこれらの国々がどのような国であったのか、気になってくる。孔子には拒否的であった小国は、実際はどうであったのだろうか。

司馬遷はそのヒントを『史記』巻二九河渠書で示唆してくれる。河渠書とは中国古代の水利の歴史をまとめた水利の通史であり、春秋戦国時代の水利を述べた箇所で、黄河の滎陽から東南に引いた鴻溝という運河が、宋、鄭、陳、蔡、曹、衛を通過し、濟水、汝水、淮水、泗水と合流していることに言及している。鴻溝とは、秦王（のちの始皇帝）の軍隊が統一直前に魏の都大梁（現開封）を攻撃した際に、決壊させて水攻めにした運河であった。楚王項羽と漢王劉邦が天下を二分したときにも、鴻溝を挟んで東に項羽軍、西に劉邦軍が城を築いて対峙し、東西二分の形勢を作った。その鴻溝が孔子が訪れた小国を通過しているというのは、いったい何であるのか。

その疑問を解くために、すでに訪れたことのある衛は別にして、南から蔡、陳、宋、曹などの地を調査する計画を立て、二〇一八年六月二二日から二九日まで七泊八日の旅を決行した。安徽省を中心に、河南省、江蘇省、山東省の四省が交わる重要な地域である。本稿は淮北平原調査記として、旅程に合わせてその成果をまとめたものである。同行者は邉見統（学習院大学文学部非常勤講師）、段宇、荘卓燐（ともに学習院大学人文科学研究科大学院博士後期課程在学）であった。とくに段宇は淮北平原の淮北市の出身、この地の事情に精通しており、綿密な計画を立ててくれ

た。仲介したのは日中平和観光株式会社の今井絵美氏、現地の洛陽王朝国際旅行社と連携し、宿泊の手配だけでなく、ガイド（陳軍志氏）とドライバー（李海楽氏）を確保していただいた。車はトヨタ・ハイエースをモデルにした六人乗りの中国車（金杯海獅）のワゴン（図1）、車高も高く、難所も走行でき、結局全走行距離は予想外の三千キロメートルにも達した。現在の中国では、GPSによるカーナビゲーションが進んでおり、短期間に多くの史跡、博物館を回ることができた。またスマホには「行図 xingtu」というアプリをダウンロードして使用することができ、とくに移動場所の位置、地勢はすぐに確認できた。車で通過する河川の名称を事前に知ることができ、車窓からも余裕をもって写真撮影もでき、標高海抜のデータもすぐに得られた。

調査前に東海大学情報技術センターの恵多谷雅弘、中野良志両氏を訪ね、調査地の地勢は衛星画像からだいたい頭の中に入れて行動した。調査後もセンターを再訪して、画像と現地踏査の情報をつきあわせた。淮北平原はいわゆる筆者が強調してきた「東方大平原」の一部であり、黄河と淮河の間の東南に緩やかに傾斜する平原である（九三頁図参照）。そのために黄河がときに洪水を契機に南流する。その痕跡は廃黄河の故道として衛星画像でも確認でき、現黄河の河道よりも氾濫原が大きく見えた。淮河に流入する支流は、西から汝河（汝水）、潁河（潁水）、渦河（渦水）など、西北から東南に向けて直線的に平原を流れている。衛星画像では市、県鎮の都市が白い斑点のように見え、この平原では非常に密集していることがわかる。古代以来の地名にも丘の字を含むものが多く（楚丘〈宋の都〉・葵丘〈斉の桓公の会盟地〉・太丘〈宋の祭祀の場〉・雍丘・敬丘・頓丘・沙丘〈趙の離宮、始皇帝の逝去地〉・公丘・蛇丘・陶丘〈曹の都〉・陽丘・高丘〈ともに後述の鄂君啓節（がくくんけいせつ）銘文の地名〉・垂丘〈後述の楚の金幣銘〉・貝丘〈斉襄公の狩場、『管子』巻第七大匡第十八〉・沛丘〈斉襄公の狩場、『史記』斉太公世家〉・宛丘〈詩経陳風〉・崢丘〈斉桓公のときの戦場〉など）、平原の都市の立地は、より小高い洪水の危険のない土地が選ばれた。楚文字（近年楚国の竹簡文書が

出土し、戦国時代の楚の文字の実例が増えてきている）の丘の字形（癶）は、鄂君啓節に見るように、高台に人二人がならぶ形を表している。調査で訪れた史跡も、海抜データをできるだけ記録することを続けた。淮河はその支流に比べて湾曲した流れが特徴であるのは、淮河の南は北と比較して大別山系の丘陵（江淮丘陵ともいう）が広がっているからである。河川が直流しないで、湾曲するのは丘陵を迂回するからである。

○六月二二日

羽田発午前八時四〇分、MU五七六便に搭乗し、上海浦東空港には十時半に到着した。上海浦東空港十五時二五分発MU五四六三の国内便に乗り換えて南京の南上空を通過して安徽省省都の合肥の北西郊外三一・八キロメートルの新橋国際空港に一六時五五分に着陸した。長江は南京付近で北流しているので、意外にも南京よりも合肥の方が南に位置する。空港から迎えの車でそのまま安徽省寿県に向かい、古代から現代まで続く安豊塘の水利施設を調査した。

【安豊塘】

安豊塘は旧名芍陂（しゃくひ）（現代中国語音でチュエペイ quèbēi）といい（『漢書』地理志で芍陂、『唐書』地理志では安豊塘と呼ぶ）、春秋時代の楚の荘王（在位前六一三〜前五九一）のときに、令尹（丞相）の孫叔敖（前六三〇〜前五九三）によって造営された灌漑施設であり、大きさを変えながら現在にいたるまで機能している。戦国時代の漳水渠、都江堰、鄭国渠と中国古代四大水利施設と並び称されている。これらはすべて現在の水利施設から古代の水利の機能を類推することができる。寿県城の南三〇キロメートルの地にあるが、造営されたのは楚が寿県城東南の寿春域に遷都する前のことである。安豊塘の北岸には孫叔敖記念館（楚相祠、芍陂祠、安豊塘祠、孫公祠ともいう）があり、安豊塘の歴史、機能などの展示があった。このあと訪れる寿県博物館と安徽博物院（合肥）にも安豊塘関係の展示がある。

楚の荘王は春秋の五覇に数えられる君主で、孫叔敖は淮水上流の期思（現在の河南省淮濱市）出身の政治家であった。孫叔は字であり、姓は蔿（ぎ）、名は敖、『史記』巻一一九循吏列伝の冒頭に孫叔敖の伝があるが、芍陂のことには何も言及していない。安豊塘の面積は次第に縮小してきたが、それでも北面は高さ三一メートルの石積みの土手が周囲二四・六キロメートルもつらなってる（図2）。土手は増水時の氾濫を防ぐものである。四方を石で直線的に固めた安豊塘の現在の形は南北に長い長方形をしており、衛星画像を見てもいかにも人造湖のように見える。一九七六年十一万余りの人々を動員して遠く八公山から石を運び、堤を築いた。訪れた夕方に急に風で激しく波打つ光景を目にすると、現在でも巨大な湖沼であることを実感するとともに、浅い人造湖であることも実感した。衛星画像では全面が濁ったような青色一色であり、深みの濃淡のある紺色の周辺の湖の色とは異なっている。湖面は周辺の土地よりも高いために、四方の周囲に繞らされた石堤は防水堤であり、各所の石門から直接水田に灌漑したり、用水路に流すようになっている。とくに北は寿県城まで用水路は細かく巡っている。湖面の中央には小さな島嶼が見える。衛星画像では二つの島嶼が確認できる。清代の光緒寿州志に見える安豊塘図によれば、形は全体に円形で、今とは異なっていることがわかる。安豊塘の水源は南の大別山系の山々にあり、何本かの水路（渠水）を引いて一本に集めている（図3）。現在は堤防には十二箇所の水門があり、北と東西の三面の方向に、稲作の水田に灌漑している。稲穂の伸びた水田を確認する。現在の周囲二五キロは古代では五〇里ほど、古代の史料では陂径百里、芍陂周二百二十四里、周二百里、百二十許里（『水経注』）と見えるから、周囲の距離では半分から四分の一程度に減少してしまったことがわかる。寿県博物館にはその次第に縮小した安豊塘の様子が図示されている。[2]

夕暮れを安豊塘から北上し寿県の隣の淮南市に入る。淮南市古陽国際大酒店宿泊。

〇六月二三日

【淮南市博物館】

淮南市博物館では沈汗青館長が迎えてくれ、解説を聴きながら、青銅器・陶磁器を中心に重要な文物を調査した。淮南市には春秋期には州来城、蔡国が遷都してからは下蔡城、蔡が楚に滅ぼされてからは楚が都の寿春城、そして前漢には淮南国の治所があり、各時期の墓葬が多く、時代の変化を見ることができる。それらの遺跡は寿県と淮南市に広がりを見せている。蔡の昭侯は前四九三年、新蔡から州来に遷都し、その地は下蔡と呼ばれた。遷都後の蔡国は昭侯、成侯、声侯、元侯、蔡侯斉と五代続き、前四四七年に楚に滅ぼされた。その楚も前二四一年に寿春に遷都してから考烈王、哀王、幽王、負芻の四代で秦に滅ぼされた。蔡の昭侯墓は隣接の寿県にあるが、声侯墓、元侯墓は淮南市に位置する。小国蔡と大国楚の文物の比較は興味深い。蔡侯と楚王の鼎の形式の差は明確である。博物館に展示されている一九五四年寿県蔡侯墓出土の弦紋獣足鼎と一九三三年楊公鎮朱家集李三古堆の楚王墓出土の銘文獣足蓋鼎を比較すると、明らかに鼎の形態が異なっている（図4）。小国蔡と大国楚の墓域は棲み分けができているようである。博物館には蔡侯墓位置図が示されていた。[3]

【寿県城】

現在の寿県城には宋代に築かれた城壁が残されている。北門が本来の姿をとどめており、西門は復元したものである。一九九一年の長江の歴史的大洪水のときに淮河も氾濫し、寿県城の西門の城壁には最大水位の二四・四六メートルの高さが記されていた（図5）。城壁は洪水時の避難場所としても役に立ち、城門には石の門扉を押さえる丸木が立てられ、洪水時には丸木を取り外して石門を下ろす仕組みになっている。一九九一年の洪水時には三〇万の避難民を守り、当時の国務院総理の李鵬はヘリコプターで寿県の城壁に降り立ったという。[4]

寿県城の立地は、その東南に隣接している楚の寿県城（鄂君啓節によれば、寿県の名称は、まだ江陵に都のあった

楚懐王のときの前三二二年には下蔡と呼んでいた。前二四一年遷都後には江陵の都と同様に郢と呼んだ。）に当てはまる。寿県城は淮水沿岸ではなく、淮水の支流の淝水の南岸のほとりに位置する。淝水は三八三年に華北を統一した苻堅が東晋軍謝玄を撃破した戦いの場である。寿県城は北は淝水、西は寿西湖、東は瓦埠湖に囲まれている。淝水の北岸には八公山があり、淮水はこの山によって北に湾曲している。

寿春故城遺跡は寿県城の東南に隣接し、戦国楚国の最後の都であった。楚の考烈王二二（前二四一）年に遷都し、楚が滅亡する前二二四年までのわずか十八年間の都城であった。南北六二〇〇メートル、東西四二五〇メートル、面積は二六万平方キロメートル、宮殿区は北部にあり、柏家台で大型の宮殿の版築基壇が発掘されている。周辺の墓葬区は四箇所、一つは蔡国の春秋期のもので、三箇所は戦国期のものである。李三孤堆の楚王墓は、瓦埠湖の東岸に位置し、寿春故城からは十五キロメートルも離れている。(5) 淮南市博物館の「淮南楚墓分布区域図」があり、墓葬が寿春故城の北から東に広がっていることがわかる。

【寿県博物館】

安徽省寿県で出土した文物の一級品は、最後に訪れる安徽博物院の方に展示されている。蔡侯墓や楚幽王墓は寿県にありながら、寿県博物館の両墓の展示品は安徽博物院提供と明示している。県級と省級の博物館の格の違いを感じさせる。また一九五〇年代の蔡侯墓出土青銅器や鄂君啓節などは、一部中央の中国国家博物館にも収蔵展示されている。さらに一九三〇年代の楚王墓の出土品は、盗掘品であったために、北京、天津に流出し、故宮文物として台湾故宮博物院にも収蔵されている（台湾には楚幽王墓から盗掘された曽姫壺が所蔵されている）。骨董商を通じて海外にも流出し、東京国立博物館東洋館にも蟠螭紋鼎が伝中国安徽省六安市（現在は淮南市）寿県出土と明示して展示されている（小林キク氏寄贈品）。寿県博物館の収蔵品は、中国近代考古学史を考える意味でも重要な意義がある。寿県

博物館と淮南市博物館と安徽博物院の三博物館の展示は、重複するものが多い。

〈越王者旨於賜剣〉（寿県蔡国貴族墓3号墓）

一九九六年寿県西圏墓地から戦国早期の蔡国貴族墓三号墓が発見され、越王剣が出土した。鳥篆文字（本来の字画に関係なく鳥の形を装飾として交えた文字）で剣の格（鍔）の部分の表裏に「越王越王」（外から中心に向かって対称的に背中合わせに越王の二字を配置）と「者旨於賜」の八字が見える。「者旨于賜」とは、『史記』巻四一越王句践世家に見える、越王句践の子の「鼫與」（在位前四六四〜前四五九）のことである。「者旨于賜」の銅剣は、上海博物館、浙江省博物館、国家博物館、故宮博物院などに所蔵されているが、出土場所がわかるこの例は貴重である。浙江省博物館のものは文字、形式が酷似している。明らかに二代目の越王が蔡国の貴族に賜与したものであるといえる。

〈蔡昭侯墓〉

一九五五年に淮河の水利の工事中、寿県西門内の北寄りの場所で二件の甬鐘を発見し、鼎・鑑・豆など三〇余件を掘り出した。その後正式に発掘作業が始まった。遺跡は正方形の竪穴土坑墓で、墓主は中央やや南側に漆の棺に埋葬されていた。腰の位置に一件の銅剣が置かれていた。墓主の東側には一体の殉葬者の骨格が残されていた。副葬品は西北側に楽器と礼器、そのなかに鼎や呉王光の銘文の鑑、方壺などがあった。東側には車器、馬具、兵器、西側に漆器、金葉、車馬器、兵器があり、南側にも兵器があり、三件の青銅剣もここにあった。全体で青銅器が四八六件、玉器が二〇件、珠器が十件、金装飾品が十二件、骨器が二八件にのぼった。多くの青銅器には「蔡侯」の銘文があり、蔡侯の名前も一字の難解な文字（申）で記されていた。呉王光（闔閭）（在位前五一四〜前四九六）の娘が蔡侯に嫁いだことを記した青銅器から、寿県に遷都した蔡昭侯（在位前五一八〜前四九一）か、それ以降の蔡侯である成侯朔か声侯産（在位前四七一〜前四五七）かであると推測されたが、その後に声侯産の墓も発見されたことから、昭

侯申であることに落ち着いた。

蔡昭侯申の蔡国は前五〇六年、呉王闔閭と小国唐とともに楚の都郢を攻撃し、楚の昭王を出奔させた。のちに蔡は楚に攻撃され呉に援軍を求めると、呉は勢力圏である州来に蔡を遷都させた。前四九三年のことであり、蔡昭侯の晩年のことである。この歳は、遷都の直前に孔子は蔡を訪れている。州来（下蔡）に遷って二年、ふたたび遷都をすることを恐れた臣下たちは蔡昭侯を殺し、子の成侯朔を立てた。そのような最期の蔡昭侯がのちの寿県の西門内に埋葬されたことになる。場所は蔡の国都の下蔡城の北に位置したのであろう。呉の庇護の下で埋葬され、呉に守られるかのように、蔡昭侯の遺体の側には大国呉の太子諸樊やその子の呉王光（闔閭）の剣がしっかりと埋蔵されていた。

〈蔡侯方壺〉

蔡昭侯墓には一対二件の方壺がある。一件は寿県博物館に、別の一件は北京の国家博物館に所蔵されている。[6] かつて中国では地方で出土した物で対になって同じものがあれば、北京と地方の博物館で分けることが多かった。六字の銘文は「蔡侯申（難字）之用壺」とあり、蔡侯申の所有物であることがわかる。酒器であり、祭祀のときには二件を左右一対として並べたのであろう。出土物のなかで呉王光鑑、豆、盥缶も一対二件が発見されている。

この方壺は独特の形をしている。口の部分は蓮の花弁が開花したようであり、胴体部には獣が張り付き、器物全体を小獣が支える。一九二三年に河南省新鄭の李家楼鄭公大墓で出土した蓮鶴方壺とよく似ている（図6）。こちらは蓮の花弁のなかに鶴がたたずむ。一対二件出土しており、北京の故宮博物院と河南博物院に分蔵されている。鄭も蔡も小国の君主がこのような方壺を所有していたことになる。蓮をあしらう造型は淮北の風土と関係があるかもしれない。

〈呉太子諸樊剣〉〈呉王光剣〉（真件は安徽博物院に展示）

蔡昭侯の遺体の腰部分に置かれていた剣がどのようなものかわからないが、遺体の南側に別置した三件の剣のうち二件は呉太子諸樊と呉王光の銘文があった。諸樊（在位前五六〇～前五四八）と光（闔閭）は父子であり、寿夢の子の諸樊が呉王に即位する前の太子のときの剣である。長子諸樊には三人の弟がいてもっとも賢い末弟の季札につねに譲位しようと考えていた。諸樊は王位につく前に楚を攻撃しているが、蔡昭侯よりも前になくなっている諸樊のしかも太子時代の剣がなぜ蔡昭侯の墓室に収められたのであろうか。呉王光の方は前五〇六年に蔡昭侯の軍とともに楚を攻撃し都郢を占領した。戦勝の記念として太子諸樊と呉王光の剣が与えられたのであろう。呉王光の剣は上海博物館にも所蔵されているが、こちらは鳥篆文字で記され、蔡昭侯墓のものは太子諸樊の剣と同様に普通の篆書体であり、装飾的な鳥篆文字ではない。

〈呉王光鑑〉（安徽博物院に展示）

蔡昭侯墓に呉王光の銘文のある青銅鑑が一対二件が副葬されていた。内壁部分に銘文が刻まれていた。一行七字、八行、五二字にわたる。二件で字形は異なる。

〈蔡侯産之剣〉（淮南市蔡家崗二号墓）

一九五九年淮南市蔡家崗で二つの墓葬が発見され、二号墓（趙家孤堆）からは「蔡侯産之剣」銘の青銅剣が出土している（図7）。二つの墓葬は早くに盗掘されており、兵器三六件、車馬器六〇件、工具三件、玉骨器二件が出土している。二号墓と並んだ位置にある一号墓は蔡元侯（即位前四五六～前四五一）墓であると推測されている。青銅剣は安徽博物院に展示されている。蔡の声侯産（在位前四七一～前四五七）が自身で越王剣に似た鳥篆文字銘の銅剣を持ち、蔡国の貴族の方は越王から賜与された剣を持っていたことになる。声侯産の時代はすでに呉は越に滅ぼされ（前四七七）、よりどころは越になっていた。

安徽省では呉王、越王の青銅器が多く出土している。所持者と呉越との政治的な関係を示すものである。とくに小国の蔡が、外交上持っていたことに興味がもたれる。

〈楚の金幣〉

郢爰、陳爰、融爰、専爰、鄭爰のほか盧金、覃金、穎という文字を黄金の地に押印した黄金貨幣が展示されている。二字の楚文字は右から左に読む。爰（別字の解釈がある）は楚の重量単位で一斤二五〇グラムであり、その前の文字は地名である。純度は九三～九七パーセントであるという。なかには八五パーセントのものもある。楚は湖北省の江陵から河南省の陳（前二七八）、安徽省の寿春（前二四一）に遷都したが、都は郢と呼び続けた。郢爰は都の郢で発行された金幣である。陳爰は陳に都が置かれていた三七年間のものよりも、遷都の期間とは別に陳で発行されたものであろう。楚の汝南や漢水流域は黄金が豊富に採掘された場所であった。(7) この黄金の産地で楚独自の貨幣が造られた。造幣地はかならずしも楚の都とはかぎらず、黄金の産地でも造られたのであろう。融・専・盧・覃の地名考証が必要である。

【新蔡県春秋故城遺跡】

新蔡県の東、洪河のほとりに新蔡故城の城壁が残されている（図8）。寿県を出発して新蔡県に向かった。前五二九年蔡の平侯が上蔡より新蔡に遷都した。前四九三年に下蔡に遷都するまで、わずか三六年間の都となった。故城の海抜は城内で四二メートル、城外で三六～三八メートルある。故城の上に昇ってその高さを確認する。戦国時代になると楚の領域となり、一九九四年に新蔡県の葛陵楚墓から竹簡一五〇〇枚余が出土している。楚の封君の平夜君成の墓である。新蔡故城の近くにはカメルーンからの輸入木材を放置してあった。家具に加工する資材のようであった。

駐馬店市に入り頤和山荘賓館に宿泊する。

○六月二四日

駐馬店市を出発し、上蔡県の北汝河を越える。蔡埠口大橋で北汝河の水量を確認する（図9）。

【秦丞相李斯墓】

楚の上蔡の人李斯は秦王の時代の始皇帝に仕えて天下を統一することに寄与した。秦の廷尉、丞相にまで駆け上がった李斯の故郷の上蔡がどのようなところであるのか、これが現地の上蔡県を訪れる目的であった。『史記』巻八七李斯列伝、唐司馬貞の索隠注では、上蔡、新蔡、下蔡の違いを『漢書』地理志を引用しながら説明している。上蔡は古蔡国であり、周の武王が弟の叔度を封じた所で、十八代の平侯のときに新蔡に移り、その後二代の昭侯のときに下蔡に移ったことに言及する。李斯は古蔡国の地の出身であることに注目したい。二世皇帝二（前二〇八）年、李斯は趙高によって死罪を宣告された。判決理由は李斯の長男の三川守李由が陳勝配下の反乱軍を阻止できず、そのことが謀反の罪とされ、父の李斯にも連坐の罪が適用された。すでに李由が項梁軍に殺されたことも知らず、李斯は処刑の直前、自分の中子に、一緒に上蔡の東門で黄色い犬を引いて狡兎を追いたいと伝えた。かなわない最期のことばであった。上蔡の東門はどのようなところであったのか。李斯の心情を理解するためにも現場を知る必要があった。

李斯墓は河南省駐馬店市上蔡県蘆岡郷李斯楼村にあった（図10）。李斯墓へ曲がる入り口の道路には李斯楼飯店という小さな食堂があり、店の名前が李斯楼であると思ったら、村の地名から来ていることに気づいた。近くには李斯楼村衛生所などの表示が見られ、李斯の故郷では李斯の名前が現在も生きていた。円墳の入り口に李斯墓の表示の碑があり、レンガで囲われた墳丘の前には「秦丞相李斯之墓」碑を中心に、左に「重修李斯墓記」碑（一九九四年）、右に「丞相李斯墓碑誌」碑（一九九四年）が建っていた。その前の空間には李斯の文章を復刻した「諫逐客書」碑、琅邪台刻石碑、会稽刻石碑、之罘刻石碑がかれの業績を誇るかのように並んでいた。墓碑誌には墓地の由来が記され

ていた。現在なぜこの地に李斯墓があるのか、『史記』李斯列伝には咸陽で腰斬の死罪を受けた後のことには言及がない。「墓碑誌」は一九九四年に上蔡県人民政府が立てたもので、文博研究館員の撰文にその由来が説明されている。李斯の墓の真偽とは別に、まさに現代の上蔡県に残る李斯伝説として受け止めたい。その文章によれば、上蔡県城西南の李七楼村に李斯の陵園があった。三十代にわたって子孫が伝えるところでは、李斯の祖先は県城東南に住んでいたが、李斯のときに移り住み、李斯楼を建てたという。李斯が咸陽で処刑された後に、幼い子が密かに李斯とその子の李由の遺骨を村の東に埋め、それ以来李斯の末裔は李斯の墓を祭ってきたという。一九九二年上蔡県の書記と県長が調査すると、墓は荒れ果ててしまっていたので、一九九三年双塚（李斯と李由の墓）を修築し、一九九四年に石碑を立てた。この墓は考古学的な調査をしたわけではなく、民間に伝わる故事に従って整備したものである。李斯への評価は、始皇帝を支え「時に因りて治めた（時代に応じて政治を行う）」が、趙高に屈従して咸陽で亡くなったという。碑の題字では「因時大臣」と記されている。県政府主導とはいうものの、李斯に好意的な立場から現代の伝説が作られていったように思われた。

【上蔡県蔡国故城】

蔡国故城は上蔡県城の西南に広がっている（図11）。李斯墓は故城の東南に位置する。故城の南壁の城壁を確認する。調査によれば、北壁二一一三メートル、南壁二七〇〇メートル、西壁三一八七メートル、東壁二四九〇メートル、南北に長い長方形で、西門が一、南門が三カ所確認されている。[8] 版築の城壁は整備され、城壁の上面を歩くことができた。蔡国が上蔡故城を放棄して新蔡に遷都した前五三〇年から、李斯が上蔡の下級郡吏でいた時代まで、二五〇年以上経過している。楚がここを占領して郡（上蔡郡かもしれない）を置いたと考えられる。李斯はその郡の下級官吏であった。この蔡国故城も郡治としてそのまま使用されていた可能性はある。

【蔡侯望河楼】

蔡侯が汝水を遠望した高台が望河楼である。二〇〇三年に省級文物保護単位に指定された碑には「玩河楼」とも記されていた。またこの高台は後漢の桓景が汝水のもたらす厄を避けて高所に登った重陽節の舞台であるとの伝説を記していた。蔡国の都が南に移り、蔡国が滅んだあとも、汝水とともに生きる人々の習俗が登高の行事として伝わっていた。秋に高所に登って厄を避けることが、汝水の洪水の記憶と無関係ではあるまい。そもそも蔡侯が高台に登って汝水を遠望したのも、洪水時の行動であったかもしれない。

【淮陽市平糧台宛丘古城遺跡】

潁河を渡り（図12）、淮陽市に入る。一九八〇年河南省周口市淮陽県城東南四キロメートル、大連郷大朱荘西南で今から四五〇〇年前の龍山文化時期の故城遺跡が発見された。夏殷周の時代をさかのぼる新石器時代の都市遺跡として全国的に注目されたものである。一辺一八五メートルの正方形で高さ三〜五メートルの城壁、宮殿遺構、陶器製作工房、墓葬のほか、南北に城門があり、南門には警備のための建築遺構や排水整備が見られ、平糧台城址と呼ばれて注目された。道路には轍の跡まで確認されている。文献では平糧台とか貯糧台とか呼ばれてきた。城址の上には楚や漢の時代の墓葬もあり、一九七九年には玉器、青銅器や越王の剣（河南博物院所蔵）も出土している。平糧台城址は二〇〇〇年の十大重要考古に挙げられている。北京大学文博歴史学院が河南省田野考古発掘教学科研実習基地を設けたので、現地には詳しく遺跡を紹介する資料がパネルで掲げられている（図13）。発掘現場の故城遺跡の周囲を回ってみた。南門遺跡付近の発掘場所はまだ作業が進行していた。『詩経』国風の陳風には宛丘の詩というものがあり、陳の都の外にあった宛丘において行われた太鼓や缶（ほとぎ）をたたいた羽根の巫舞の様子が謳われている。陳は周の武王が舜の末裔の嬀満を封じた国であり、舜を祭らせた国であった。小国陳の都は、それ以前の都市を継承するも

のであった。

【鹿邑県太清宮】

老子の生誕地の遺跡が河南省鹿邑県城東五キロメートル、太清鎮に残されており（図14）、一九九七年に河南省文物考古研究所が建築遺構を発掘した。後漢の桓帝の時代、延熹八（一六五）年に老子の生誕地に老子廟が置かれた。老子と同じ李姓の唐王朝の時代、天宝二（七四三）年に太清宮と命名された。唐代の玄宗期の開元神武皇帝道徳経注碑のほか大宋重修太清宮之碑などが残されている。老子の故郷は、『史記』巻六三老子列伝に「楚の苦県の厲郷仁里の人」とあり、この楚の苦県の意味は、老子が前四七九年に楚が陳を滅ぼした前の人間であれば、陳の苦県でのちに楚の苦県となったと解せる。しかしそもそも老子という李耳、字は聃という人物は、孔子が会見した伝説では孔子と同じ春秋時代の末の人物であるが、また別の楚の老來子であったのか、さらに戦国時代の周の太史儋であったのか、司馬遷も三人の老子を挙げているほど謎めいた人物である。一九七三年に湖南省長沙で馬王堆前漢墓から前漢高祖と文帝景帝期の二種類の帛書の老子のテキストが出土し、一九九三年には湖北省の郭店楚墓から戦国末期の竹簡の老子が出土し、さらに北京大学が入手した前漢の武帝かそれ以降の老子竹簡が出現してから、老子の研究は新たな段階に入っている。現存する老子八一章の文章の由来を戦国末期にまでさかのぼって考察できるようになった。老子という人物も、戦国時代の人物として考えられている。

一九九七年の発掘に際しては、西周早期の大型の中字形墓葬（中の字形のように墓室に二本の墓道がある形式）が発掘され、「長子口」の銘文のある青銅器が多く発見されたので、長子口墓と呼んでいる。この長の字は微字と字形を混用するので、微子口と読むべきだとされている。[9] 微子は殷の紂王の庶兄、紂王を諫めて殷を去ったが、紂王が周の武王に殺された後、紂王の子の武庚を立てて殷の遺民を治めさせた。しかし武庚を支えた管叔と蔡叔が反乱を起こ

したので、武庚と管叔は殺され、蔡叔は追放された。その後に微子に宋の国を封じて殷の遺民を治めさせたのである。宋の末裔である孔子は、微子と紂王の叔父の箕子と比干を殷の三仁として評価している（『論語』巻第九微子第十八）。老子の故郷と微子の関係は定かではないが、鹿邑県の太清宮の場所が歴史的に由緒ある土地であることは間違いない。苦県は陳の都淮陽（わいよう）と宋の都睢陽（すいよう）の中間にある。長子口が微子口であれば、殷や宋に近い場所で老子は育ったことになる。

亳州市に入り亳州賓館に宿泊する。

○六月二五日

【永城県芒碭山漢文化博物館】

亳州から高速道路に入り、河南省永城市に向かう。この地は淮河の支流が多く、みな東南の傾斜に向かって平行に流れている。亳州の海抜は四一メートル、寿県に比べてかなり高い。永沙運河を通過したが、傾斜を利用して開鑿すれば運河の造営はそれほど難しくはない地形である。永城市の東北に芒碭山がある。主峰は海抜一五六・八メートル、十を越える小山が並ぶ。孔子も曹から宋に向かう途中で雨を避けるために立ち寄ったという夫子山もある。芒碭山の地名は『史記』巻四八陳涉世家に、「陳勝、碭に葬られ、諡して隠王と曰う」とあり、秦末の農民反乱の指導者であった陳勝の埋葬地として知られる。秦の時代には碭郡という一つの郡が置かれていた。そしてこの芒碭山には前漢文帝の子で景帝の同母弟（竇皇后の子）の梁の孝王劉武と子の共王劉買の陵墓があることがわかった。前漢梁国は楚国の西隣りにあり、都は睢陽（現在の商丘市）に置かれたが、陵墓は楚国の彭城にも近い芒碭山に置かれた。『史記』巻一二九貨殖列伝では「鴻溝以東、芒碭山（あるいは芒県と碭山、漢代には芒県、碭県に分かれる）以北、巨野に属するは、此れ梁、宋なり。陶、睢陽も亦た一都会なり」といい、漢代の梁の地は、戦国の魏の地ではなく宋の地を継

承した地方のことである。魏（梁）の最後の王の仮は、秦に滅ぼされて豊に移されたので、豊の地方を梁ともいった（『史記』巻八高祖本紀秦二世二年集解注）。山のない平地の睢陽よりも、碭山の岩山に梁の諸侯王の陵墓を求めた。前漢諸侯王陵は、梁国も楚国も、洪水の危険のない岩を刳りぬく横穴式の山陵形式を選んだ。石室の陵墓内は涼しく、そのままでは岩盤の隙間から水が漏れ出る。そのために陵墓はただ岩盤をくりぬくのではなく、くりぬいたあとに直方体の塞石をすきまなく接着剤を用いて組み合わせて半地下の空間を設ける。三陵墓で三千ほどの塞石が使われている。一つ一つの塞石には「第九（九段目）、四十三、厚二尺、広（縦）三尺六寸、袤（横）五尺」というように刻まれ、場所に合わせた大きさの石が正確に積み上げられていた。排水のシステムも工夫されている。その土木技術力には目を見張る。墓道から入り甬道を経て被葬者の棺のある主室に行き当たり、その周りには回廊がある。回廊の目的は、棺を収める空間を外壁から遮断するものであろうか。これとは違う竪穴式の墓葬では棺を収める部屋を槨室といい、木材で外側の土の壁面と遮断する。車馬や武器など各種の陪葬品を収めるのは、側室である。墓室と陪葬坑の部屋とが甬道でつながっている。このような墓葬形式はいつから始まったのであろうか。

〈前漢梁孝王陵〉

梁国の孝王劉武（前一七八年代王、前一七六年淮陽王、梁王の在位は前一六八～前一四四）は高祖劉邦の孫、文帝の子である。父文帝の陵墓は霸陵といい、高祖劉邦の長陵、その子の恵帝の安陵の人工墳とはまったく別の自然山陵をはじめて造った。前一五七年、孝王の父文帝は長安の未央宮で亡くなった。そのときの遺詔で「霸陵の山川、その故に因りて、改むる所有る毋れ」と伝えた。霸陵は灞水のほとりの自然の山の覇山そのまま陵墓にし、自然の地形を改めて墳丘を築くことはしないという内容である。前漢皇帝陵のなかで文帝の霸陵だけが自然山陵を陵墓とした。文帝の子の梁孝王は前一四四年、兄弟である景帝よりも先に亡くなり、芒碭山系の保安山という自然山岳の南に陵墓を

築くことになった。一方景帝自身は文帝とは異にして、高祖劉邦、恵帝と同じ人工墳にもどした。梁孝王は前一五四年劉氏王国が反乱を起こしたいわゆる呉楚七国の乱のときに、中央政府側に立って応戦した人物であった。かれの力戦がなければ景帝の側は敗戦していたかもしれない。そうした梁孝王が父文帝の遺詔に忠実であっても不思議ではない。墓室の入り口は東向き、全長六〇メートル、幅は三〇メートルの規模である（図15）。梁孝王以降、梁国の八代九王が芒碭山に墓地を設けていった。周辺には王以外の漢墓も分布しており、数十の画像石墓も発見され、二百余枚を数える。これらは永城漢画像石とも呼ばれている。芒碭山漢文化博物館内に展示されている。線の細い独特のタッチが印象的である。

〈前漢梁孝王后陵〉

一九九一年発見され、一九九二～九四年に発掘された。同じ保安山のなかの北隣りに王后が墓室を並べた。地下の墓室を別にしているので、同冢異穴と呼んでいる。孝王陵と同様に、墓道・甬道・主室・側室・回廊からなる。側室は三四もあり、なかには貯氷室も見られる。隣の孝王陵へは相思道という通路が造られており、実際には連結はしていないが、孝王のあとに王后が亡くなったことが墓葬形式からもわかる。文帝の霸陵では皇后を同じ山に合葬することはなかった。梁孝王の母竇（とう）太后は武帝の治世まで太皇太后として生き、文帝と同じ霸陵原の丘陵に合葬はされたが、霸陵の山陵に入ることなく、別に墳丘を作り埋葬された。梁孝王の王后の方は、孝王陵と同じ山の中に並んで埋葬されたのである。中央の皇帝・皇后陵でも実現しなかった埋葬形式が諸侯王陵で実現したことになる。

〈前漢梁共王陵〉

一九八六年に採石作業のときに保安山東南で梁孝王の子の共（恭）王劉買（在位前一四四～前一三七）の陵が偶然発見され、一九九一年まで発掘された。一九九一年の全国十大考古新発見の一つに挙げられた。墓室は父母の陵墓の

入り口と向かい合わせの西向きである。漢代の皇帝陵はすべて東向きに作られているが、共王陵は逆の西向きである。墓室の全長は七〇メートル以上、主室南壁の上面には四神雲気図が描かれている。主室には諸侯王の金縷玉衣が残されていた。青龍・白虎・朱雀と霊芝、雲霧、漢代の四神は地上の地形を表現するものではなく、二八星宿の東西南北の星座を表している。たとえば東方の星座を組み合わせると青龍の形となる。前漢末の西安交通大学天文壁画とならぶ貴重な天文画像といえる。現場のものは複製であり、実物は河南博物院に移されている。

【陳勝墓】

秦末に反乱を起こした陳勝は河南省永城市東北の芒碭山の西南山麓に埋葬された（図16）。一九七五年に国家文物局が墓葬を修復し、周恩来首相（政務院総理、国務院総理）の揮毫した「秦末農民起義領袖陳勝之墓」碑が立っている。『史記』巻四八陳涉世家によれば、秦二世皇帝二（前二〇八）年の十二月、陳勝（字は涉）は陳王になって六ヶ月、汝陰から下城父に行き、そこで御者の荘賈に殺され、遺体は碭に埋葬されたという。潁川の陽城出身の陳勝が、陳王となって立てた国の都の陳でもなく、なぜ芒碭山に埋葬されたのであろうか。その後、漢王朝を建てた高祖劉邦は碭にあった陳勝の墓に三〇家の墓守を置いて祭祀を絶やさなかった。芒碭山は劉邦にとっての聖地であった。劉邦は泗水亭長であったときに、驪山陵（始皇帝陵）の建設のための労働力として引率していた刑徒を豊の西で解放した。劉邦が酒に酔って道を塞いだ大蛇を剣で切ったという故事が残されている。その場所が芒碭山であったと伝えられる。現在も芒碭山の南麓に「劉邦斬蛇の処」が梁王陵の北に残されている。劉邦はのちに碭において秦の章邯軍と戦い、碭の五、六千の兵力を吸収している。劉邦はそもそも陳勝の反乱に呼応して立ち上がったのであった。陳勝の亡き後は、新たに民間から立てられた楚の懐王のもとで、沛公劉邦は碭郡長となり、碭郡の兵を率いることになった。陳勝が芒碭山に埋葬されたのも、劉邦の聖地であったことと関わっているのであろう。

【大澤郷遺跡】

宿州市東南約二〇キロにある西寺坡鎮は二〇一四年に大澤郷鎮と古名に改められた。現地には一九六一年宿県人民政府が立てた「陳勝呉広起義旧址」の碑がある（図17）。文化大革命中は陳勝・呉広の乱が評価されたこともあって、一九七三年から七九年まで西寺坡人民公社の名称が大澤郷人民公社とわざわざ改めたこともあった。農民起義の場所には渉故台という反乱軍が誓いを立てた高台があり、龍眼井という古井戸もある。明清と民国時代の石碑が四件残されている。明碑は楼台寺仏殿、清碑は射鼓台（反乱軍が軍事訓練をした高台）および重修射鼓台、民国碑は民国三二（一九四三）年のもので渉故台と記されている。古碑の裏手にはそれぞれを改刻した現代の碑が建てられている。

『史記』陳渉世家によれば、二世皇帝元（前二〇九）年七月、北辺の漁陽の防備にかり出された九百人が、蘄県大澤郷に集められた。陳勝と呉広がその集団のまとめ役であった。大雨に遭い道も遮断され、期日内に漁陽に到着することが難しくなったので、死罪を覚悟しなくてはならない。逃亡して死罪となるよりも、二世皇帝の政治に反旗を翻して大義を掲げる道を選んだ。陳勝は将軍となり、呉広は都尉となり、大澤郷を攻め、蘄県を収めた。大澤郷の郷名からすれば、大きな湖沼があったことになるが、現在は見られない。

【垓下遺跡】

前二〇二年、項羽軍の最後の決戦の場となったのが垓下（がいか）であった。前年に西楚覇王項羽は漢王劉邦と鴻溝をはさんで休戦の協定を結んだ。鴻溝の西を漢軍、東を楚軍が領分とした。しかし劉邦は張良と陳平の計略に従い、項羽を追いつめていくことになった。陽夏、固陵から城父、そして垓下へと追うことになった。今回の調査では安徽省霊壁県の東南、固鎮県東約二〇キロメートルの濠城鎮垓下村の垓下遺跡を訪れた。(10)

垓下の戦いは『史記』巻七項羽本紀と巻八高祖本紀に項羽最期の場面が描かれている。しかし樊噲、夏侯嬰、灌嬰

などの列伝には、垓下の前に、かれらが参加した陳下の戦いのことが記されている。垓下の戦いとは陳下の戦いのことであったという説が出されているが、[11] 両大戦は別のものであり、[12] ここでは実際に訪れた固鎮県の遺跡の状況を紹介したい。

垓下遺跡はたんなる平原の戦場遺跡ではなく、項羽が淮北平原の地勢（河川と丘陵）を十分いかして築いた堅い守りの城壁であり、それは『史記』項羽本紀の本文と注で説明された垓下にまさにぴったりと符合する。[13] 現地には発掘調査の概要をパネルに掲示してあった。二〇〇七年からボーリング調査が始まり、大汶口文化の土坑墓から戦国、漢代の遺跡までが発見された。二〇〇九年の全国十大考古発見に選ばれた。『漢書』巻二十八上地理志にいうように、垓下は沛郡下の洨県にあり、また『後漢書』郡国志によれば沛郡洨県には垓下聚という集落があったという。山東大学の欒豊実は垓下遺跡の下の新石器時代の遺跡を調査発掘している。垓下は現在の沱河（古代の洨水）の南岸に近接した海抜一六・五〜二二・四八メートルの小高い丘にあり、東西面と南面は沱河の水を引いて濠としている（図19）。北面は三四〇メートル、南面は二八〇メートル、西面は四八〇メートル、東面は四一〇メートル、周囲は一六〇〇メートル、河川と濠に囲まれた南北に長いやや楕円形に近い城であった。東門付近には城門の石材も残されており、東西南北にそれぞれ門があった。北門は河川に接しているから、水運の港としても機能していたといえる。城内は現在も集落があり、集落内の池をさらったときには漢代の画像石も発見されている。河川に面した小高い丘陵地形は新石器時代から生活に便利な立地であり、項羽も従来の集落を利用して濠を囲み、短期間に垓下の城を築いたのであろう。垓下は項羽の故郷の下相県にも近く、項羽にとってなじみの深い土地であった。垓下とは垓下城のことであり、四面楚歌の包囲に一時的にも耐えられる城でなければならない。[14]

『史記』巻七項羽本紀正義に引く『括地志』によれば、項羽の愛姫であった虞姫の墓は、濠州定遠県東六〇里にあ

り、長老伝では項羽の美人の冢であるという。現存する虞姫の墓の墳丘を見ながら、淮北市に入り、曼哈頓国際飯店に宿泊する。

○六月二六日

【淮北市博物館・中国隋唐大運河博物館】

淮北市博物館は国家二級博物館として一九七六年に創建され、新館は二〇〇一年に建てられ、二〇〇四年に開館した。一九九九年に運河遺跡が発見され、多くのスペースで関連展示がされているので、隋唐大運河博物館とも呼んでいる。

〈運河遺韵（展示の題目）〉

柳孜（りゅうし）運河遺跡と呼ばれ、隋唐時代の通済渠の遺跡から八艘の唐代の沈没船が発見され、大量の陶磁器が出土した。同時に宋代の波止場の遺跡の石材（石灰岩）も発見された。沈没船は独木舟と貨物船であり、再現された「柳江口」の波止場の遺跡に展示されている。貨物船は全長二七メートル、幅三・七メートル、尾舵は北宋時代の垂直舵とは異なるという。独木舟は樹齢千年の香樟木で作ったもので、長さ一〇・五メートル、幅一・二メートル。博物館の陶磁器の展示には、柳孜遺跡で出土したものと、丁仰振先生寄贈品とが混ざっている。丁氏は博物館の副館長であり、不動産業を営んでいる陶磁器コレクターである。発掘時の出土品とは別に、入手したもののようである。展示品では唐代の唐三彩、寿州窯、白磁、褐釉、白釉などが見られる。唐三彩の獅子抱柱はこぶりで珍しいものである（図20）。唐三彩は豆・鉢・枕・盆・碗・盂・罐・碟など各種容器が発見されている。内陸運河沈没船の積載品として歴史的な価値は高い。唐三彩を焼いた窯は長安や副都の洛陽などに限られていたから、それらを南方に運んでいたことになる。宋代、元代の陶磁器も出土している。龍泉窯（浙江省）、吉州窯（江西省）、景徳鎮窯（江西省）、鈞窯（河南省禹県）

など各地の陶磁器を運搬していた。通済渠は元の時代も一部機能していたことになる。やがてここを通過せずに京杭大運河によって北京に通ずる水運に変わっていったのであろう。通済渠は鄭州付近から黄河を引き、開封、宋城（商丘）、永城、柳孜をへて泗州で洪沢湖に入り、邗溝に合流する。黄河と淮水を結ぶ新たな水路を人工的に開鑿したものであった。[15]

博物館にはそのほかに〈古相遺珍（古い相県の遺産）〉のコーナーでは、淮北市が古代の相県の地であり、戦国時代の版築の土城があることを展示してあった。戦国時代の古相城の都市排水施設の展示も興味深い。二〇〇五年に淮北市体育場双墩孜墓では銀縷玉衣が発見されている。〈淮北漢画像石〉のコーナーでは、この地の独特の画像石が展示され、なかには玄武、朱雀、白虎、青龍などの画像が見られる。

【徐州漢文化景区・市博物館】

徐州市内に入る。徐州は春秋戦国、秦漢時代は彭城といい、三国以降に徐州といった。彭城の地名の語源は、帝堯のときに彭祖が建てた大彭氏国に由来する。春秋時代末期に宋の領域に入ったが、徐州市東の邳州市で発見された梁王城遺址が呉の闔閭に滅ぼされた徐国の国都であるともいわれ、注目される。その地勢の特徴は廃黄河（宋元明清時代の黄河）や泗水などの諸河川が合流し、のちに京杭大運河が通過し、諸丘陵に四方を囲まれているので、四方に交通が開けていながら、守りやすい土地であった。しかし洪水には弱い。禹貢の九州の一つの徐州の方は、泰山から泗水の流域を経て淮水までの間、東は海に接した広域を指す。その中心が彭城であり、のちに彭城は徐州と改名した。この地は古来争奪戦が繰り返された。前五七三年楚と鄭が宋の彭城邑を攻撃したときに、宋の成公は晋に援軍を求めた。晋は宋・魯・衛・曹・莒・邾・滕・薛など十三国の小国軍を動員して救援した。項羽は彭城に都を置き、ここで劉邦の漢軍を排撃したこともあった。

前漢王朝は楚王韓信に代えて、高祖劉邦の弟の劉交を楚王に建てた。以降五代にわたって劉氏の楚国が続く。後漢王朝も光武帝劉秀の子の劉英以降六代にわたって楚国・彭城国（二代以降）が続く。中央の劉氏王朝にとって重要な諸侯王国が彭城に置かれた。そして歴代の楚王の陵墓が徐州市内に作られた。洪水の危険があるので、いずれも自然山陵の形式をとっている。徐州市の北には北洞山楚王陵（自然山陵）、亀山楚王陵（自然山陵、前漢襄王劉注夫妻合葬）、東には馱藍山楚王陵（自然山陵）、東洞山楚王陵（自然山陵、前漢楚王）、西には楚王山楚王陵、臥牛山楚王陵、南には南洞山楚王陵（自然山陵、前漢楚王・王后）、中央の徐州市政府の近くには土山漢墓（人工墳、後漢彭城王）と獅子山楚王陵（自然山陵、楚王劉戊）などである。多くは岩盤の山であり、岩を削り墓室を作った。山陵の楚王陵には山のなかに王陵と王后陵の二つの墓室をもつものと、墓室を共有するものとがある。廃黄河は土山彭城王陵のある雲龍山と獅子山の間を北から南へ流れていた。今回は土山漢墓と獅子山楚王陵を回った。

〈後漢彭城王陵〉

土山漢墓は高さ四三メートルの墳丘墓であり、項羽の家臣の范増墓と伝えられていた。文化大革命中の一九六九年に一号墓が発掘され、銀縷玉衣が出土し、後漢彭城王の王后墓と確認された。一九七七年には二号墓が発掘され、やはり玉衣片の一部が散乱した状態で発見され、また墓室が諸侯王クラスの黄腸題湊で作られていることがわかった。黄腸題湊は墓室を密封するために柏木の角材断面の木目の黄色い面（黄腸）を外側に向けて、隙間のないように積み重ねた（題湊）ものである。二号墓では柏木の代わりに石材を積み重ねているので、黄腸石と呼んでいる。徐州は石材が豊富で、漢代の採石場の遺跡も残されている。二号墓の被葬者は後漢彭城王とされたが、どの代の彭城王かは確定できていない。後漢の光武帝の子の劉英が楚王になった後、明帝の子の劉恭が彭城王（靖王）となり、その子孫が考王劉道、頃王劉定、孝王劉和（火山漢墓に埋葬され銀縷玉衣の劉和は別人）と続き彭城王劉祇で終わる。この墳丘

内の墓室を保存し、二〇一二年この地に移転して開館した徐州博物館の一部として見学できる。

【獅子山楚王陵】

獅子山楚王陵は現場に保存され、公開されている（図21）。出土品は徐州博物館に展示されている。墓主は確証はないが高祖劉邦の弟の楚王劉交の孫の劉戊と考えられている。呉楚七国の乱に加わって、中央の景帝に反乱した人物として知られる。墓室に入ってみると、墓道は幅が細く、外墓道、中墓道、内墓道と長いことがわかる。内墓道には武器庫や厨房の側室がある。斜面の墓道が終わると墓門に塞石があり平行に走る甬道と区別されていたことがわかる。墓道は埋葬後に上から版築の土で埋めてしまう。甬道は石でくりぬきの通路であり、左右には御府庫、印庫などのほかに女官の陪葬の部屋がある。後室に玉で覆った漆棺が置かれ、なかに遺体を収めた金縷玉衣が残されていた。金縷玉衣は四二四八片という最大の玉片からなり、もっとも早い時期の玉衣である。徐州博物館に展示されている。獅子山の北二〇〇メートルにある羊亀山では王后陵が発見され、二〇〇五年に発掘された。

獅子山楚王陵の墓主が楚王劉戊であれば、前一五四年に埋葬されたことになる。前漢皇帝のなかで唯一自然山陵に埋葬されたのは前一五七年の文帝である。劉戊は三年前に亡くなった文帝の遺志をついで山陵に埋葬されたことになる。さらに文帝でさえ山陵に皇后を合葬することがなかったのに、王后も山陵に埋葬した。徐州という地勢は、平地に人工墳を築くのではなく自然山の上に墓室を設けることによって墓室内への浸水を避けることができた。獅子山の西の麓には廃黄河の故道が走っている。山上の陵墓は高さから見ても黄河の氾濫の影響は受けなかった。陵墓の自然環境にも注目すべきであろう。

〈漢兵馬俑博物館〉

獅子山楚王陵は山上に位置するが、兵馬俑坑はその麓に作られ、現場には徐州漢兵馬俑博物館として保存展示され

ている（図22）。一九六五年発見の前漢楊家湾漢墓兵馬俑二千件や、一九九〇年の景帝陽陵陪葬坑の兵馬俑と同じ大きさ（四〇～五〇センチメートル）であり、それらとあい並ぶ規模と数量である。全部で六号坑まであり、四号坑までは博物館のなかに、五、六号坑は獅子潭という湖の底に展示され、見学できるようになっている。ということは、墓室は洪水の危険のない山上の高所に作られ、陪葬坑である兵馬俑坑は麓の低地に作られたことを示している。一～三号坑は歩兵軍、四号坑は儀仗隊、五、六号坑は騎兵軍であり、一号坑は九二〇件、二号坑は一三〇四件、三号坑は未発掘で推定千件あまりの数量である。

博物館の外側の回廊部には漢画像石の展示があり、徐州画像石と呼ぶほど豊富な画像石の一部が公開されている。

【微山島微子啓墓・張良墓】

微山湖をフェリーで渡り、微山島に入る。微山島は楕円形、東西六キロメートル、南北三キロメートル、島の西北部に二つの丘がある。微山島には漢代画像石墓がいくつか発見されている[16]。漢代の留県はすでに明代に形成された微山湖中に没しており、高地に墓地が置かれ、画像石槨墓や土坑墓などが現在まで残されている[17]。微山島の最高地点の海抜は九〇・六メートル、漢代の人々は、少なくとも前漢武帝時の黄河の洪水の記憶があるはずであるから、高所にわざわざ墓地を築いたのは泗水の氾濫を避けていたと考えられる。都市は城壁に守られているが、先祖の墓地は自然の地形の高地に頼った。微山島溝南村と万荘北の石槨画像石には泗水昇鼎を題材にしたものがそれぞれ一件ずつある[18]。

島内には殷の微子啓墓と伝えられるものがある。微子啓は殷の紂王の庶兄、周に封ぜられた宋の国ではなく、この地に埋葬された根拠はどこにあるのだろうか。『魏書』地形志によれば留県に微山と微子冢があると記されているから、この高台が微山と呼ばれた由来として微子啓墓があったという伝説が後世生まれたのであろう[19]。

棗荘市に入り、舜和棗荘大酒店に宿泊する。

○六月二七日

【薛国故城遺跡】

棗荘市を出発、薛国故城遺跡に向かう。戦国時代の封君の孟嘗君田文の居城であり、父田嬰の領地を受け継ぎ、孟嘗君は薛君、薛公とも呼ばれる。斉の都臨淄は遠く、もとは薛という小国の地であった。孟嘗君は薛城に全国から賓客や亡命者を集め、食客は三千人とか数千人とか言われた。孟嘗君は斉の丞相となり、薛城の一万戸の税収で食客を養ったという。孟嘗君は斉の湣王に仕えていたが、斉が燕を中心とした連合軍に攻められ、湣王が莒に亡命してそこで亡くなり、襄王が新たに立てられたときには孟嘗君は中立を保ち、斉に援軍を出すことはなかった。薛城の位置は斉の都臨淄とは離れ、魯の都曲阜の南に位置する。全国から食客を招きやすい地にあり、諸侯の国々からも中立を守りやすく、魏にも秦にも附こうとすれば自由に動ける位置にあった。実際に秦の昭襄王に招かれて、一時秦の丞相になったが、すぐに帰国することになった。孟嘗君が亡くなると、薛城は斉、魏に攻められて滅ぼされ、孟嘗君の家系は絶えた。薛君は田嬰、田文の二代で終わることになった。『皇覧』によれば、孟嘗君の墓は薛城内の向門の東（門に向かって東）にあったという。のちに司馬遷が薛城を訪れたときにも、孟嘗君の時代の任侠の風紀は残り、六万余家の人間が住んで賑わっていたという。

薛城の城壁の東北部を京滬鉄道（北京〜上海）が南北に貫通している（図23）。鉄道に平行した道路から城内に入り、北城の東端の城壁に登ってみた。道路と線路の間には碑二件が残されていた。城内の海抜は四八メートルを計測する。孟嘗君の陵園の建物が近くに見えたので、道路から迂回して行ったが、施錠されて中には入れなかった。位置は故城内の東北の隅にあたる。『史記』巻七五孟嘗君列伝に引かれた『皇覧』では、孟嘗君の墓のある門は北辺に出る門だという。その城内から門に向かって東に墓があるという記述に相当する場所に孟嘗君の陵園があった。『水経

注』でも城郭の側にあって石で槨室と作っていたという。文化大革命以前には墳丘が残され、父の田嬰の墓と並んでいたが、更地にされたという。調査によれば、城壁は東壁は二二八〇、南壁は三〇五〇、西壁は二〇三〇、北壁は三二五〇メートル、周囲は一〇六一〇メートルとかなりの規模である。城門は各面三つずつ設けられている。城内には居住区、宮殿区、手工業区があり、別に墓葬区も孟嘗君墓のある東北部のほかに、東南部、宮殿区東の城内と城外にもある。[20] 孟嘗君の時代よりも前の春秋前期の墓が発掘され、「薛侯行壺」の銘文のある青銅提梁壺が出土している。斉はこの薛国の小城を占拠した後に、東方戦略の拠点として城壁を拡張し、田嬰、田文の居城としたのであった。

薛城から微山湖を北上し、橋を渡って沛県に入る。かつて泗水亭長であった劉邦が薛県まで配下の求盗の役人を送ったことが知られている（『史記』巻八高祖本紀）。任侠の風が残る薛城を警備したのであろう。劉邦のころは微山湖はないので、薛城と泗水亭は近かっただろうと思いながらの移動であった。

【沛県泗水亭公園・歌風台】

漢王朝を樹立した劉邦はまだ秦の時代に沛県下の泗水亭の長となった。当時の泗水は沛県のほとりを流れていたので、そこに亭という治安を守る役所が置かれていたのである。現在は泗水亭公園となっている。泗水亭の管轄が沛県だけでなく泗水を渡って薛県にまで及んでいたのは、治安警備の範囲は犯罪者の逃亡のことを考えれば、当然県を超えざるを得なかったからであろう。秦の沛県には長官の沛令、沛県の上の泗川郡には泗川守がいた。陳勝の反乱に呼応した沛県の人々は中央の秦朝から任命された沛県令を殺し、地元の劉邦を沛公と呼んだ。泗川守の壮は沛公らに薛城で破れ、逃亡の途中殺された。現地を歩くと、沛県、泗水亭、豊邑、薛城といった若き時代の劉邦の行動の地理的関係がよく理解できた。高祖劉邦は泗水亭長として、沛県の刑徒を酈山（始皇帝陵）の建設労働力として輸送する任務を負っていた。あるとき沛県から出発したが、逃亡者が多かったので、豊邑の西にあった沢（沼沢）で夜半に解放

した。沛県から酈山に向かうには西にある豊邑を通過しなければならなかった。

【豊県劉邦広場】

高祖劉邦は沛豊邑中陽里の人と『史記』巻八高祖本紀はいう。沛豊邑というのは秦の時代は泗川郡（漢代には泗水郡と書く）の管轄下であったから、秦の泗川郡沛県の豊邑の出身ということになる。劉邦が立てた漢王朝になると泗川郡は沛郡となり、沛郡の郡治は沛県に置かれ、その近くの村の豊邑も豊県に格上げされた。漢代の行政単位でいえば、劉邦は沛郡豊県の出身となる。豊県は現在も豊県といい、その豊県に劉邦広場があり、高祖劉邦の大きな銅像が立っていた。高祖劉邦が皇帝となった晩年には、ともに戦った劉氏以外の異姓（劉氏以外の）諸侯王を粛清した。高祖が淮南王黥布の軍を攻撃した帰路、沛県に立ち寄って酒宴を開き、沛県の児童百二十人に自作の詩を合唱させた。皇帝劉邦は沛県に恩恵を与えたが、沛県の人々は高祖劉邦の生地である豊邑にも恩恵を与えるように願った。こうして豊邑は県になっていく。これより前に高祖の父が亡くなったときに、始皇帝陵に置かれていた酈邑の町を新豊と名付けたのも、亡き父親に故郷の豊邑を思い起こさせようとする配慮であった。高祖の生地豊邑への思いはとりわけ強かった。

【廃黄河】

豊県から南に大沙河を越え（図24）、豊黄路橋を渡り、江蘇省から安徽省に入った。するとすぐに廃黄河橋を通過した（図25）。ここがかつて黄河が南流した故道であり、草が生い茂っていたが、故道の跡ははっきりと残されていた。近くに砂利と砂の資材置き場があり、そのなかの黄色い砂の山が目に入った（図26）。あきらかに近くの黄河故道の砂を建設用に採掘したものである。辺り一面の地面も黄色い土壌であった。この辺りの建設現場ではこの黄色い砂をコンクリートの材料として使用している。梨畑が見られるのも、水はけのよい砂地であるからである。廃黄河と

呼ばれるのは、十二世紀南宋（北方では金）の一一九四年以降十九世紀一八五五年まで黄河が南流（山東丘陵の南側を流れる意味）した故道であることからきている。一一九四年～一三五一年（南宋〈金〉～元末）、一三五一年～一四九四年（元末～明）、一四九四年～一八五五年（明～清）で南流黄河の決壊箇所は異なる。結局六六〇年もの長きにわたって南流していたことになる。これとは別に一九三八年～一九四六年（中華民国時期）の黄河南流は鄭州の花園口で決壊し、この故道を通過してはいない。当時は潁河、渦河の範囲で氾濫した。黄河北流（山東丘陵の北側に流れる意味）時期でも、前漢武帝期の前一三二年から前一〇九年までの二三年間、黄河は濮陽で決壊して一時的に南流し、あとで訪れる鉅野沢（大野沢）に流れ、先の沛県付近を通過し、淮水に注いだ。武帝は最後は決壊場所を修復したので、一時的な南流で終わった。

【商丘市宋国故城】

商丘市に入り宋国故城の発掘現場に行く。関係者の不在のためにフェンスの中に入ることはできなかったが、入り口に「宋国故城」の発掘状況を説明するパネルがあった（図27）。発掘現場ではこのような形で情報を提供することが多い。それによれば両周時代（西周・東周）の宋国の都城遺跡は一九九七年に中国とアメリカの連合考古隊（中国社会科学院考古研究所とハーバート大学）が発見したという。普通、城壁の版築は地上に残されるが、この城壁は黄河の一時的な氾濫によって泥土が堆積したために地下に埋没していた。国務院は二〇〇六年に全国重点文物保護単位とした。宋国故城は東西方向が少し長い長方形であり、東壁は商丘故城（帰徳府城とも呼ばれ、北宋時代には首都の汴京の陪都〈副都〉として南京応天府が置かれた。現在も城壁が残る）の東側にあり、長さは南北二九〇〇メートル、北壁は商丘故城の北にあり、東西は三二五二メートル、南壁は三五五〇メートル、西壁は三〇一〇メートル、周囲は一二九八五メートル、面積は一〇・二平方キロメートル、現存の商丘故城の十倍近い面積である。城壁の底部は幅二

五〜二七メートル、上部は幅十二〜十五メートル、高さは約十メートル、城壁の上部は現在の地表よりも一メートルあまり下にある。城門の遺跡は五カ所発見され、西周時代にすでに作られ、東周（春秋戦国）時代まで使用されたが、前二八六年に宋国は楚、斉、魏の三国に滅ぼされた。この現場は南壁の第二考古発掘地点であり、睢陽城（秦漢以降宋代までの県城）の西南角と宋国故城の南壁の重複した場所である。現場には宋国故城内に帰徳府城（商丘故城）と睢陽城とが重複した地図があり、古宋河の河川が故城内を走っていることがわかった。

説明のなかにあるように、黄河の氾濫によって宋国故城が埋没しているという点は重要である。一般的に古代の故城は版築の城壁が残るものであるが、城壁が地上になく、地下に埋没していることもときにはある。商丘市の北は宋代以降の黄河の故道が走っている。黄河の氾濫によって宋国故城が埋没してしまったことになる。たしかに発掘現場一帯の土壌は、黄土であった。

宋国は殷の紂王の庶兄の微子啓が封ぜられた国であり、睢水のほとりの平原に城が築かれ、もともと無防備であった。戦術的に無防備であっただけでなく、河川の氾濫からも無防備であった。春秋の五覇にも数えられた宋の襄公は、楚、斉の大国との鹿上の会盟を主宰することで防衛した（前六三九）。その後大国楚の侵略から国を守るために、泓水の戦いでは敵兵の渡河を待つ仁義を重んじて臨戦したが、結局大軍に敗北してしまった。墨翟は戦国初期の宋国の大夫になり、小国宋を攻撃よりも防御に専念して国を守ろうとした。そうした宋国の都城が、一辺が三キロメートルもある大きなものであることがわかり、しかも黄河の泥土に埋もれていたことが印象的である。前六八三年秋、宋の湣公のとき、宋で大水が起こり、穀物に被害があったと記録されている。このとき魯はわざわざ水害の慰問した。遺跡に残された城壁の高さは十五メートルは、どの程度洪水を防げたのであろうか。

【范蠡墓】

河南省商丘市から北上し、山東省菏沢市の定陶区に入った。定陶は古地名では陶ともいった。『史記』巻一二九貨殖列伝によれば、越王勾践（在位前四九七～四六五）に仕えた范蠡は、いわゆる会稽の恥を雪ぐために呉を攻めて呉王夫差（在位前四九六～前四七三）を自害させ、呉を滅ぼした。その直後、范蠡は越を去り、舟に乗って北上して斉に行き、名を隠して鴟夷子皮と称し、さらに陶に入り、朱公と名乗った。范蠡は陶が天下の中心であって諸侯の地に四方が開け、貨物の交易に適していることに目をつけて商業に従事した。[21] 十九年間に三度も千金を蓄え、巨万の財をなし、陶朱公と呼ばれたという。いったい范蠡が着目した陶の地がどのような意味で物資の集まる天下の中心とされたのであろうか。現地に入る目的はここにあった。

陶朱公范蠡の墓のことは、『史記』貨殖列伝の正義の注に引かれた唐代の地理書『括地志』に言及され、陶山の南五里に朱公の冢があるとしている。現地の菏沢市定陶区范店村には確かに范蠡墓の墳丘が整備されていた（図28）。「陶朱公墓」碑には定陶県の重点文物単位に一九八二年に公布されたことが記され、横に並ぶ「范蠡墓」碑には山東省文物保護単位として二〇一三年に山東省人民政府、二〇一五年に菏沢市人民政府が認めたことが記してあった。碑文の裏には墓の位置がGPS測地点として記されていた。二〇一八年の新しい碑文は范氏第七四代玄孫范明春氏が建てたものであった。レンガで囲み、墓の一角が整備されていたのはインドネシア在住の華僑の支援によるものであるらしい。天下の中心の意味はこのあとに訪れる菏沢市博物館で確認することになる。

【項梁墓】

范蠡の墓の東に項梁の墓があることを現地で知った。項羽の叔父の項梁は、定陶で亡くなるまで、反乱軍の主導権を握り、かれの死後項羽が前面に出て劉邦と対峙することになる。秦末の反乱軍が拠点を置いたのは、経済的にも自

立しえる豊かな場所であった。定陶の地はまさにそれにふさわしかった。項梁は秦の将軍章邯にこの定陶の地で大敗して戦死した。項梁の墓が戦死した定陶にあるということは事前に知らなかったので、改めて定陶の地の重要さを認識することになった。二〇〇六年に建てた「項梁墓」の山東省重点文物保護単位の碑と、一九七九年に定陶県人民政府が公布して二〇〇三年に建てた碑があった（図29）。二〇〇六年の碑では現存の封土は高さ二メートルで楕円形と記されていたが、現在はさらに削られていた。二〇〇三年の碑では東西四〇メートル、南北七〇メートルの範囲が保護区域であるという。一九八八年生まれの三一歳の地元の青年の話では、小さいときに周りの溝の水たまりを封土を削って埋めた記憶があるという。范蠡と項梁、定陶の地で時代を超えてつながっていた。

【梁王彭越台】

彭越に関わる史跡の存在も現地で知った。彭越は昌邑（定陶）の出身、近くの鉅野沢（大野沢ともいう）で漁業を生業とし、盗賊として名を馳せていた。陳勝や項梁が決起するのを聞くと、湖沼に群がっていた無頼の少年たち百数十人が彭越の下に集まってきた。勢力はすぐに千人を超え、かれは劉邦軍の下で将軍となり、三万あまりの兵を率いるまでになった。その彭越が漢王朝樹立後故郷の梁王に封ぜられ、定陶を都とした。練兵場の高台が梁王彭越台の史跡である。賈楼村西北百メートルに位置する。「梁王台遺址」碑が二件、定陶県人民政府が一九七九年に定陶県重要文物保護単位であることを公布し、二〇〇三年に建てたものと、二〇一三年に山東省文物保護単位であることを省人民政府が公布して建てたものである。さらに二〇〇四年に建てた「漢梁王彭越記念碑」もあった。

【菏沢市博物館】

〈元代沈没船〉

二〇一〇年山東省菏沢市の国貿中心の建設現場において驟雨で溜まった水を排出する過程で、元の時代の沈没船が

発見された[22]。菏沢市博物館には出土品と沈没船の復元模型が展示されていた（図30）。北に向いた船体の長さは二〇・五メートル、幅三・七メートル、高さ一・八メートル、内部は船首と船尾と十の船艙に分かれている。第一、二艙は船員の休息場所で酒器などが出土し、第三〜七艙は積荷、第八艙は船主の休息場所、第九艙は食堂、第十艙は大量の鉄鍋など炊事道具が出土した厨房であった。貨物には青花（染付）、青磁、青白磁などが六〇数件、龍泉窯（浙江省）や鈞窯（河南省禹県）の製品が見られる。これまで元代の沈没船は八件発見されているが、うち四件は内陸の運河船、別の四件は海洋船である。京杭大運河上のものでは北京東南方荘（一九八八年）、河北省磁県（一九七六年）、山東省聊城県（二〇〇二年）から発見されている。明代の沈没船の方は菏沢市よりも北の梁山から一九五六年に発見されている。元の至正一四（一三五四）年銘の銅権（ハカリのおもり）が出土しているので、沈没時期は一三五四年から一三六八年の間と推定されている。元代には菏沢の南を黄河が泗水方面に流れており、至正十一（一三五一）年の黄河の洪水時には菏沢方面に北に決壊している。沈没の理由には、黄河や済水の増水が関係していたかもしれない。発見場所は菏沢市内の趙王河で発見されており、京杭大運河ではなく、済水を京杭大運河方面に航行していたのであろう。周知のごとく一九七五年韓国全羅南道の新安沖で元代の沈没船が発見された。大量の青磁や白磁などの陶磁器が積載されていた。出土した木簡に至治三（一三二三）年の年号があり、菏沢の沈没船とほぼ同じころに東アジアの海を渡った船舶もあることから、東方大平原の内陸の河川交通と東アジアの海洋の交通路とが連係していたことがわかった。陶磁器の生産の現場は内陸にあり、国内需要では内陸の水運網を利用して運搬し、海外向けは海港から海を渡っていったのである。船舶の構造も、内陸の河船は平底で水深も浅く、海洋船はV字形の水深が深いものであったことがわかっている。

菏沢市では銀座華美大酒店宿泊した。

○六月二八日

【鉅野県城】

一九三三年の航空写真に鉅野県の洪水場面が写されている（図31）。この写真をもとに現在の巨野県（現在では鉅を巨と書く）を訪ねた。古代にはここに鉅野沢という大きな湖沼があり、前一三二年前漢武帝のときには黄河が濮陽で決壊して鉅野沢を溢れさせ、梁楚の地に大洪水を起こし、南は淮水、泗水まで流れたと記録されている（『史記』巻二九河渠書）。決壊が修復されたのは前一〇九年のことである。また鉅野沢のほとりは、孔子の晩年に麒麟が捕獲されたことで知られている。鉅野県の東には現在でも麒麟鎮があり、ここも調査した。

一九三三年の写真では鉅野県の城壁がまだ残されていたことがわかる。現在は北関付近に大水塔があり、城壁があった付近は小さな道路になっていた。城壁があったことの時代を知る住民もいた。標高データを確認すると、城内は四一～四二メートル、場外北部は三九メートルとやや低い。写真では城内は水害から免れているようであり、北部、東部は一面海のように水がみなぎり、西北部には水が及んでいないことがわかる。

【麒麟鎮】

『史記』巻四七孔子世家によれば、魯の哀公一四（前四八一）年春、大野で狩りをしたときに、叔孫氏（魯の貴族）の車子の鉏商が獣を捕獲し、これを不祥なこととした。仲尼（孔子）はこれを見て、麟であると認めた。また魯の西（魯の都曲阜の西）で麟を狩りして「わが道は窮まった」ともいった。もとになっているのは『春秋』の経文の「十有四年春、西に狩して麟を獲たり」という記事と、『春秋左氏伝』の記事である。後者によれば捕獲された麟は虞人（山沢管理官）に下賜された。仁獣の麒麟が末世に現れたことを不吉と考えたのである。この地は春秋時代には大野沢といい、漢代には鉅野県の北にあったので鉅野沢と呼ばれている（『史記』巻二夏本紀集解注に引く後漢の鄭玄注）。

『史記』孔子世家の注に引用された唐の『括地志』によれば、麒麟堆が鉅野県の東十二里にあったという。麒麟堆というからには小高い丘があったことになる。明代の『孔子聖迹図』の「西狩獲麟」には各種刊本があり、背景に小高い丘らしきものが描かれている（図32）。しかし、堆というと一般に古墳のような盛り土を指すので、これには当てはまらない。現在の麒麟鎮は巨野県の東七キロメートルにある。麒麟堂寺の前に麒麟台遺址の標識があり（図33）、麒麟台、麒麟塚という麒麟堆に相当する高さ五メートルの土盛りがあった（図34）。一九七九年に鉅野県の重点文物保護単位となっている。当時の調査では東周から宋代までの文物が確認されたという。二〇〇九年には菏沢市級文物保護単位、二〇一三年には山東省の文物保護単位となっている。二〇〇八年に建てられた獲麟考碑によれば、捕獲された麟が埋められた場所が麒麟塚であるという。遺跡を管理する人の話では、一九三三年の洪水の被害も大きかったという。

麒麟伝説の真偽をさぐるよりも、古代の麒麟伝説の舞台が鉅野沢にあったことに注目したい。古代の鉅野沢の水源はそこに注ぎ込む済水にあったし、沢（湖沼）は黄河の洪水の遊水池の働きをしていた。その鉅野沢は唐代までその名称とともに残っていた（『史記』巻一二九貨殖列伝正義注）。その後、梁山のほとりの水滸伝の舞台となった梁山泊に移り、現在ではさらに北上して東平湖として残っている。

巨野県から安徽省の省都の合肥まで、高速道路で一気に戻った。最後に淮北平原と淮南丘陵の地勢を比較することができた。淮河を渡ったときには、大型の輸送船舶が並んで浮かんでいた光景を見た（図35）。淮河の南では、ちょうど大雨によって部分的に洪水している現場も通過した。

【安徽博物院】

安徽省博物館は一九五六年十一月に設立され、二〇一〇年十二月に安徽博物院に改称された。一九九九年に高知県

立美術館で安徽省博物館名品展が開催され、青銅器の出展数は少ないが、寿県西門蔡侯墓出土青銅「蔡侯」編鐘、朱家集李家集李三孤堆出土青銅捕蛇鷹のほか屯溪弈棋出土銅人など出品されており興味深い。[23]

〈楚幽王墓と鋳客大鼎〉

一九三三年安徽省寿県で水害が発生し、寿県城東南にあった李三孤堆楚王墓と呼ばれた墓が露出して水に流された。この災害時に大規模な盗掘が行われ、巨大な大鼎をはじめ数多くの青銅器が持ち出された。大鼎は寿県政府のもとにすぐに回収された。一九三四年安徽省安慶市の県図書館に収められた。一九三七年日中戦争が始まると、国民政府は重慶に運び、一九三九年故宮文物とともに四川省宜賓県、楽山県安谷郷まで運んだ。一九四五年日中戦争が終結すると、南京に戻され、一九四八年安徽省文献委員会の副主任委員の李則綱は台湾に運ばれようとする大鼎を南京から安徽へ戻し、一九四九年には蕪湖、一九五二年には合肥の省博物館準備員会に収められた。そして一九五八年に当時の国家主席毛沢東が安徽省博物館で実見することになる（図36）。ちょうど大躍進政策を目指し、鉄の鋳造生産を発動したときである。毛沢東は古代のあまりに大きく技術の高い鼎に驚いて、牛一頭を調理できるのでないかと語ったという。

すでに寿県博物館で大鼎の発見事情は確認していたが、実物は安徽博物院に展示されていた。一九三三年八月には黄河でも大洪水が発生し、黄河の水が南流しているので、寿県もその影響があったのだろうか。水害をきっかけに盗掘される事例をはじめて知った。この鼎は口沿部の銘文から鋳客大鼎と呼ばれている。楚幽王のために外国人（客）の鋳物職人が製造したという意味である。重量な四〇〇キログラム、高さ一一三センチメートル、口径八七センチメートル、その巨大さは殷墟で発見されていた司（后）母戊鼎につぐ大きさであった。司（后）母戊鼎は方鼎であるので、円鼎ではこれが最大となる。盗掘品が回収され各地を転々とした歴史は興味深い。[24]

楚幽王墓の出土品四千余件は二度の盗掘によって中国国内と一部は海外に分散してしまった。安徽博物院にはうち約六、七百件が所蔵されている。そのほかどこに流出したのだろうか。陳治軍『安徽出土青銅器銘文研究』（時代出版伝媒股份有限公司、二〇一二年）には、寿県朱家集器として所蔵場所を網羅的に記録している。安徽博物院以外に、北京故宮博物院、天津市歴史博物館、中国国家博物館、上海博物館、南京大学、旅順博物館、吉林大学（羅振玉旧蔵）、米国個人蔵、日本東京国立博物館、葉恭綽旧蔵（北京故宮博物院）、台北故宮博物院、広州博物館、于省吾旧蔵（遼寧省博物館）、陳仁寿旧蔵（現蔵不詳）、于省吾旧蔵（北京故宮博物院）と、盗掘品の流出経路と最終所蔵先がうかがえる。一つの墓からの出土品がこれほど広汎に流出したことをつきとめられる事例はまれである。東京国立博物館所蔵展示のものは蟠璃紋鼎として伝安徽六安市寿県出土、一九三〇年代朱家李三孤堆楚国大墓出土として紹介されている。寄贈者の坂本キク氏は古美術商不言堂坂本五郎の母である。ちなみに坂本五郎の青銅器コレクションは奈良国立博物館に寄贈され公開されている。

〈双墩1号春秋墓：鍾離国の遺産〉

一九九一年、安徽省蚌埠市の淮水の北三キロメートルに双墩という二つの円墳があり、その一号春秋墓が発掘され、青銅鐘の銘文「童鹿君柏」から、鍾離君柏の墓葬とされた。[25] 鍾離国とは『史記』巻六六伍子胥列伝に登場する。楚の平王のときに、楚の辺邑の鍾離と、呉の辺邑の卑梁氏の女性たちが桑の葉を奪い合ったことから、両国の兵士が争う事態になった。呉が公子光に楚を伐たせたときであり、隙に乗じて途中の楚の領域の鐘離と、隣りの居巣を下して帰国した。この鍾離国の位置は、『史記』索隠注では六安にあるといっている。しかし鍾離君の墓地は淮水南の六安の地ではなく、実際には淮水流域の北岸にあった。鍾離君墓はこれまで見たことがないほどの特異なものである。中原からは淮夷とも呼ばれた異文化を小国の墓葬に見ることができる。

この墓は高さ九メートル、直径六〇メートルの大型の円墳であり、淮水流域では早期の墳丘で、その工法は版築（層状に土を突き固めて重ねる工法）ではなく、土をただ盛り上げた工法である。内部の土壌は、黄・灰（青）・黒・赤・白の五色を混ぜ合わせてあり、とくに黒、白の土壌は外部からわざわざ調達したという。封土を上から順番に水平に剝いでいった写真が展示されていてわかりやすい。封土の下には円形の白土層が現れ、その形は玉璧のような中央に鍵穴のような形が空いており、そのなかには車輪のスポークのような二〇本の放射線状の模様が五色土で作られている。その下には十八もの円形の土丘があり、千を越える小さな土偶が密集して並べられている。その下に十字形の墓室があり、中央の被葬者の主人の周りには東西北に三人ずつ、南に一人の殉葬者が埋められていた。青銅器、玉器、陶器、金箔飾など四百件を越える副葬品が出土した。

鍾離国の遺跡は実は双墩一号春秋墓にとどまってはいなかった。[26] 蚌埠市の東の鳳陽県には鍾離故城があり、二〇〇七年には故城近くで卞庄鍾離墓が発見され、「童鹿公柏之季子康（鍾離公柏の子の康）」の銘文のある鐘が出土し、墓にはやはり十人も陪葬されていた。さらに蚌埠市から遠く一五〇キロメートルも南に離れた安徽省舒城県ではすでに一九八〇年に九里墩春秋墓が発掘され、龍虎紋四環鼓座が出土し、安徽博物院に展示されている。四つの円形の環（持ち手）のついた太鼓の台座に一五〇字の銘文があり、「鍾離公魚又」の名があった。上の双墩一号墓の青銅器の戈には徐国の名とともに鍾離君が徐人を捕らえたことが記されていたので、故城のある安徽省の鳳陽県を拠点として蚌埠市と舒城県とに鍾離国の勢力圏が広がっていたものと思われる。鍾離国も先の記事にあったように、楚と呉の大国の狭間にあって前五一八年呉に滅ぼされることになった。ちょうど蔡昭侯の即位の歳であった。

〈鄂君啓節〉

一九五七年寿県東南郊外の邱家花園で農民が発見、舟節一件、車節三件、さらに一九六〇年にも舟節一件が発見さ

れ、鄂君啓節と呼ばれている。この地はのちの楚の都寿春城の一角であり、楚が遷都する前は楚の領域下の下蔡城であった。現在北京の国家博物館に舟節、車節一件ずつの二件、安徽博物院に同じように舟節一件、車節二件の三件が収蔵され、舟節一件と車節一件の真件が並べて展示されている。寿県博物館の二件は複製品である（図37）。大きさは舟節の方がやや長く三一センチメートル、車節は二九・六センチメートルである。舟節と車節を割り符として符合させることはないので、竹をかたどった舟節と車節の節の位置は異なる。舟節の二件、車節の二件を符合させれば、車節の一件が余ることになるが、はたしてそのように使用したのであろうか。幅はともに七・三センチメートル、厚さは舟節が〇・七センチメートル、車節が〇・六センチメートルで微妙に異なっている。文字は舟節が一行十八字で全九行一六二字（重字記号の命の字を二字分として数え、一字を合字にしているのを別に数えれば一六四字となる）、車節は一行十六字で全九行一四四字（一字分の一車の合字を二字、重字記号の命を二字分にすれば一四七字、二十は廿と表記して一字分となる）である。撮影した真件と複製を並べて比較してみると、博物館が展示のために制作した複製品の技術と特徴がよくわかる。青銅自体の色合いや錆びの具合まで忠実に真件をまねることはなく、真件の方は年月による象嵌金字のかすれ具合などすぐ見て取れる。[27]

この割り符は銘文では金節と称し、楚の懐王（在位前三二八～前二九九）が前三二三年に鄂君啓に与えたものである。関所を通過するときにこれを提示しすれば免税の優遇措置を得られた。関所には同じ金節が置かれ、節の位置を合わせ、文面を照合させたのであろう。一年間に舟は三隻を単位に一五〇隻分まで、車は五〇乗分まで免税が許可された。鄂君啓はみずからの領地の鄂の市を出発し、終着は楚の都郢であった。途中の経路として舟節では水路、車節では陸路が記されている。舟節では河川名が挙げられ、江水（長江）を中心に、漢水、夏水、湘水、沅水、澧水などの河川が見える。河川を遡り、河川を下り、また河川を渡って移動した。長江とその支流が中心の経路であった。陸

路の方は、陽丘、邡（方）城、免禾、栖焚、緐陽、高丘、下蔡（寿春）、居鄛など淮水以北の地名が多い。淮北では淮水の支流を横断する経路をとり水運を利用していない。最初に鄂君啓の封地の鄂の市場で何かの積み荷をし、最後は積み荷を空にして都郢に入った。黄金と革（よろい）・箭（矢）の輸送は禁ぜられ、馬牛羊にはあらかじめ課税されると記してあるので、それ以外の何らかの重要な商品を扱ったと思われる。鄂の地は銅緑山があるなど銅の産地であることを考えると、青銅の原料の銅を販売していた可能性が高い。青銅（銅・錫・鉛の合金）は祭祀・軍事できわめて重要な材料であり、この金節自体の素材でもある。経由地の下蔡で複数の金節が発見されたということは、鄂君側が持っていた複数の金節が何らかの理由で紛失したのであろう。符合すべき金節の方は、楚の都郢と関所に置かれていたのであろう。

合肥市の北城世紀金源大飯店宿泊する。

○六月二九日

淮北平原の調査を終えて帰国する。合肥市の新橋国際空港から上海浦東空港経由で羽田空港に到着する。移動が多く過密な日程であったが、事前に計画した史跡、博物館はほぼ訪問でき、また現地の情報で新たに日程に加えた場所もあった。淮北平原が、中国古代文明の中心地としていかに重要な地域であったのか、当初の予想を超えて多くの知見を得ることができ、大変満足している。同行者の三名は、事前の資料の収集、現地との手配、また現地での撮影などに尽力していただき、筆者一人では調査の実現は困難であった。最期に感謝を申し上げたい。

注

（1）濱川栄は両漢交替期の農民反乱、諸群雄の抗争の背景として最重要経済地域であった淮北平野が洪水被害にさらされ続けて

きた事実を明らかにした（『中国古代の社会と黄河』早稲田大学出版会、二〇〇九年）。

（2）芍陂については村松弘一「中国古代淮南の都市と環境―寿春と芍陂」『中国水利史研究』二九号、二〇〇一年、「漢代淮北平原の地域開発―陂の建設と澤」『東洋文化研究』八号、二〇〇六号、「後漢時代の王景と芍陂（安豊塘）」狭山池シンポジウム二〇一二「ため池築造と偉人」狭山池博物館参照。

（3）（淮南市博物館編著『淮南市博物館文物集珍』文物出版社、二〇一〇年）。

（4）https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=寿県&oldid68155205

（5）許宏『先秦城市考古学研究』北京燕山出版社、二〇〇〇年。

（6）蔡昭侯墓出土の一件の蔡侯申銅方壺は北京の中国国家博物館に収蔵されており、二〇〇〇年に筆者が監修した中国文明展で展示した。

（7）『管子』第二二巻国蓄第七三に「玉は禺氏に起こり、金は汝、漢に起こり、珠は赤野に起こる」と見える。楚の汝水、漢水流域は金の産地であった。

（8）前掲許宏『先秦城市考古学』一〇九頁。

（9）王恩田「鹿邑太清西周大墓與微子封宋」『中原文物』二〇〇二年第四期。

（10）周運中「楚漢決戦之垓下在今霊壁県考」『宿州学院学報』第二六巻第六期、二〇一一年。

（11）辛徳勇「論所謂〝垓下之戦〟応正名為〝陳下之戦〟」（『歴史的空間與空間的歴史』北京師範大学出版社、二〇〇五年所収）、佐竹靖彦『項羽』（中央公論新社、二〇一〇年）も辛徳勇説を支持する。

（12）施丁「陳下之戦、垓下之戦是両事―與陳可畏、辛徳勇商榷」『中国史研究』二〇〇三年第一期。

（13）垓下の戦いは楚漢の戦争でのクライマックスであり、映画やドキュメンタリーでも取り上げられる。たとえば筆者も関わったＮＨＫドキュメンタリー「古代中国よみがえる伝説」第二集「項羽と劉邦　王者の条件」二〇一八年一月二日。

（14）この時代については柴田昇『漢帝国成立前史　秦末反乱と楚漢戦争』白帝社、二〇一八年参照。

（15）安徽省文物考古研究所・安徽省淮北市博物館編『淮北柳孜―運河遺址発掘報告』科学出版社、二〇〇二年。

（16）王思礼・頼非・丁衝・万良「山東微山県漢代画像石調査報告」『考古』一九八九年第八期。

（17）微山県文物管理所「山東微山県微山島漢代墓葬」『考古』二〇〇九年第一〇期。

(18) 前掲『考古』論文。鶴間和幸「秦始皇帝諸伝説の成立と史実—泗水周鼎引き上げ失敗伝説と荊軻秦王暗殺未遂伝説」(『秦帝国の形成と地域』汲古書院、二〇一三年所収)では微山湖中溝南村画像石、微山島郷画像石の二件を取り上げた。万荘北のものは著書では未収録である。微山島画像石全般は馬漢国主編『微山島漢画像石選集』文物出版社、二〇〇三年。

(19) 張希宇「微子墓及墓碑辨偽」(『山東大学学報(哲学社会科学版)』一九九六年第四期)は微子墓の前にある漢篆微子墓碑の漢碑ではなく、後世の偽造であるという。

(20) 山東省済寧市文物管理局「薛国故城勘査和墓葬発掘報告」『考古学報』一九九一年第四期。

(21) 大川裕子「范蠡三徙説話の形成—水上交通路との関係を中心に—」『中国古代の水利と地域開発』汲古書院、二〇一五年、第三編第一章。

(22) 「山東菏沢元代沈船」『二〇一〇中国重要考古発見』。

(23) 『安徽省博物館名品展—中国悠久の至宝—』高知県立美術館、一九九九年。

(24) 安徽博物院、寿県博物院のパネル参照。「李三孤堆楚墓與〝鑄客〟大鼎」http://www.360doc.com/content/16/0719/17/5896561_576823970.shtml。

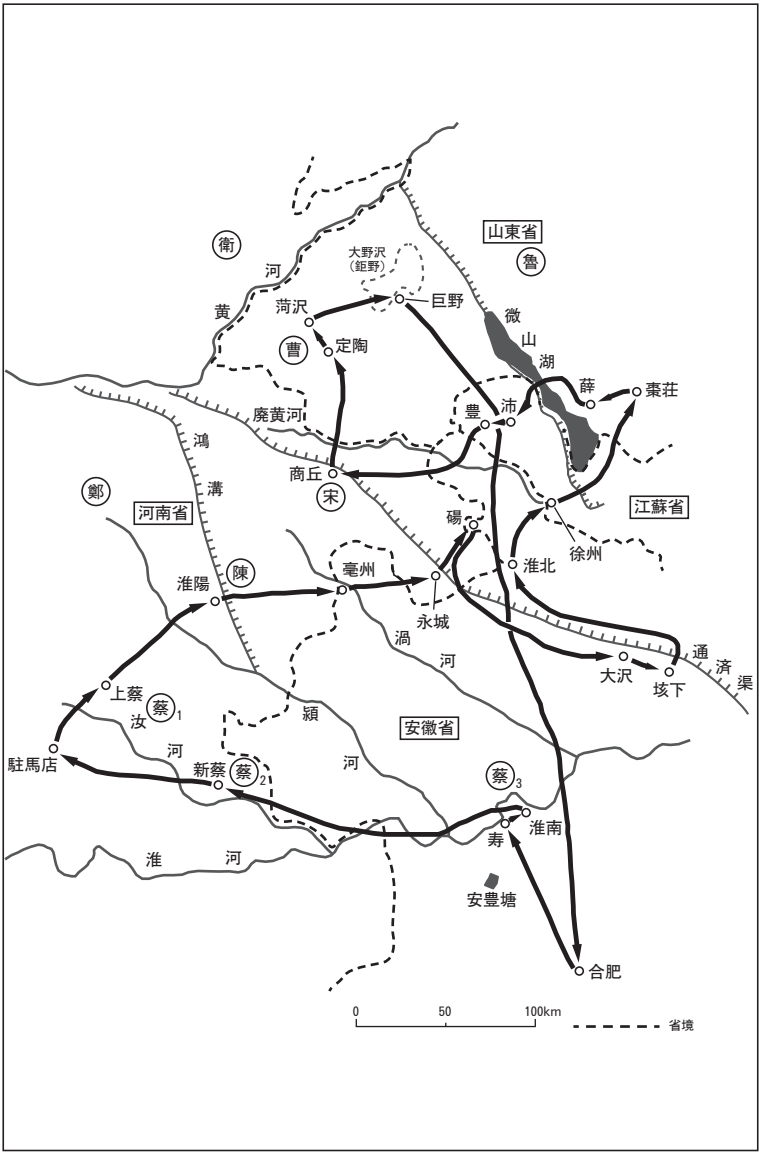
「天津博物館蔵古代青銅器賞析」http://www.360doc.com/content/15/0722/18/13708883_486695185.shtml。

(25) 「安徽蚌埠双墩一号春秋墓葬」『二〇〇八中国重要考古発現』。

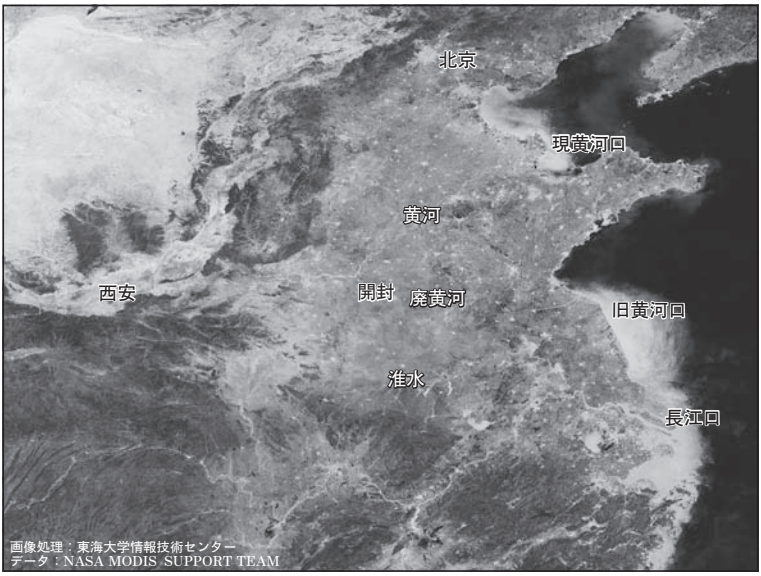
(26) 闞緒杭(安徽省文物考古研究所)「淮河中游鍾離国墓葬考古重大新発現」http://ch.ntnu.edu.tw/files/archive/718-326c54a8.pdf。

(27) 日本では筆者が監修した二〇〇〇年横浜美術館開催の中国文明展で、当時の安徽省博物館の舟節と車節を一件ずつ展示した。『世界四大文明 中国文明展』NHK、二〇〇〇年。また二〇一六年開催の「漢字三千年—漢字の歴史と美—」(富士美術館)でも同じ安徽博物院所蔵の車節を展示した。

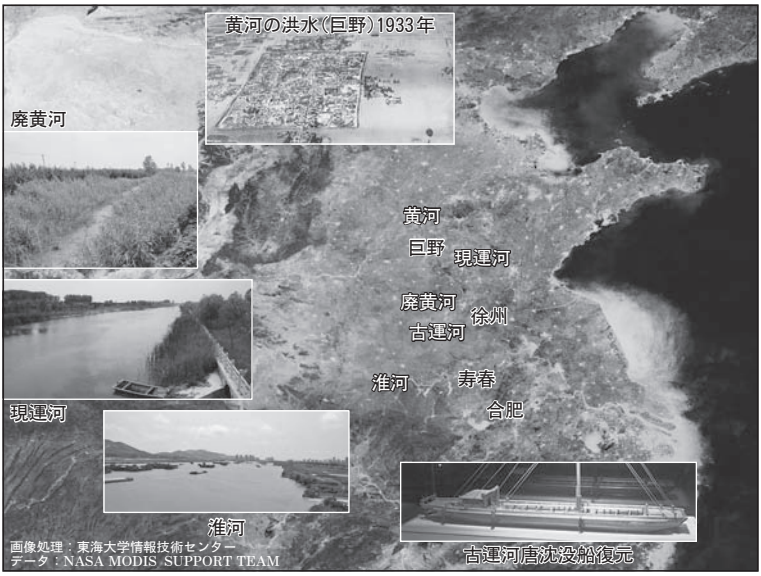
中国淮北平原調査記図版



調査経路



東方大平原の衛星画像



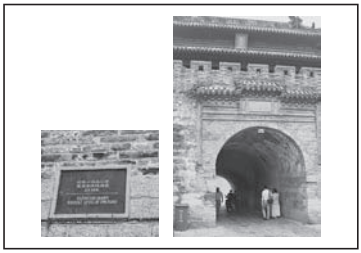
調査地の衛星画像

1　調査時の車

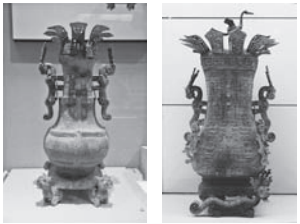
2　安豊塘と石堤

3　芍陂の水源図（上は南）

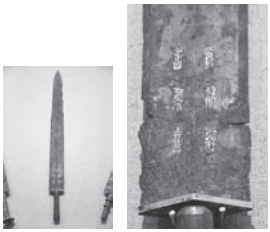
4　蔡国と楚国の鼎



5　寿県城門と洪水時の冠水地点（左下）

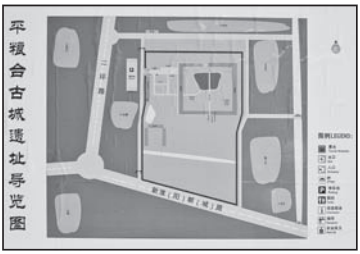


6　蔡侯申方壺　寿県博物館　　蓮鶴方壺　国家博物館



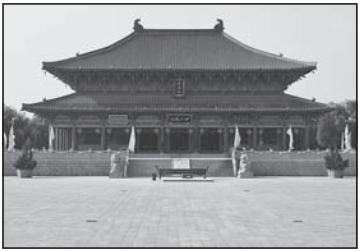
7　蔡侯産の銅剣　蔡侯産之用剣

8　新蔡故城



13　平糧台故城遺址

9　北汝河



14　鹿邑太清宮　老子の生誕地

10　丞相李斯墓（安徽省上蔡県）

15　梁孝王陵

11　蔡国故城

16　陳勝墓

12　潁河

21　獅子山楚王陵の内部

17　大澤郷

22　獅子山楚王陵の兵馬俑

18　垓下遺址

23　薛城城壁の版築

19　垓下城図

24　大沙河

20　柳孜遺跡から出土した唐三彩（柱を抱える獅子）

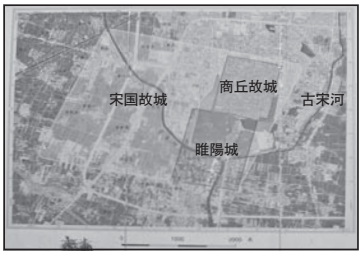
29　項梁墓

25　廃黄河橋（右下）と廃黄河

30　元代沈没船の復元

26　廃黄河の砂

31　1933年鉅野県の洪水



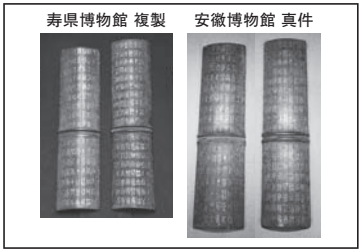
27　宋国故城図

32　孔子聖迹図（明）西狩獲麟

28　范蠡（陶朱公）墓

36　毛沢東と楚王墓出土大鼎

33　獲麟台遺址



37　鄂君啓節

34　麒麟塚

35　淮河（淮水）安徽省蚌埠